

原三溪の漢詩を読み解く「遊金澤」（古人迂第二集より）

発表者：小林会員

小林会員から、漢詩分科会での6ヶ月間に及ぶ苦闘の成果が発表されました。取り上げる漢詩は、大正12年9月から大正14年12月までの漢詩が編まれている「古人迂第二集」より、「遊金澤」です。

遊金澤 加州藩祖擬金陵建業城築城府

玉山遙掛北辰雄 建業城開烟樹中 春色暁連越南動 金陵四月萬花紅

この漢詩には多くの疑問点があったそうです。金陵・建業（いずれも南京市の古称）に擬して金澤の城府を築いたのは、加賀藩の藩祖前田利家なのか。いや、第十二代藩主前田斉広が城府を金城と名付けたという碑文がある。北辰（北極星）の下に雄姿を見せる玉山とはどこなのか。金澤にゆかりが深いのは南の方角にある白山だが、もしかして玉山とは特定の山を指すのではなく、人格高潔な人の例えなのか。越南とはベトナムではないとすると、呼び習わしはないが、越の国（北陸）南部～越登賀の意味か。そして、三溪さんが金澤に遊んだ春四月とは、いつのことなのだろうか。ついには当時の列車時刻表を元に、金澤行きの旅程まで披露されました。



『保勝会 30年のあゆみ』にみる当時の三溪園

発表者：三溪園川幡参事、廣島会員



まずは廣島会員から、あまり知られていない資料『財団法人三溪園保勝会 30年の歩み』より、三溪園の土地が横浜市のものとなって、昭和28年から33年まで行われた復興工事などのエピソードが紹介されました。昭和33年から三溪園に勤務している川幡参事からは、そのエピソードに登場する人物から見聞きした話や、昭和59年に愛知県にある博物館明治村で開催した原三溪展の裏話などを披露していただきました。